

朝鮮美術展によせて(2)

朝鮮土器の魅力

朝鮮の土器、もちろん古い時代のもので、日本では新羅焼(しらぎやき)という名で良く知られています。新羅焼と言っても、普通は新羅の国、又は新羅の時代の作に限っているのではなく、もっと広義な朝鮮の古代土器の代名詞として用いられています。これは新羅土器が朝鮮土器を代表するものであるところから来ているのですが、朝鮮の土器には、それ以外にも思わず手にしたくなるような魅力あるものがいくつかあります。

朝鮮では先史時代という遠い昔から各地で様々な土器が作られています。その主なものを時代の古い順に挙げてみますと、まず新石器時代(紀元前5,6000年～900年頃)の櫛目文土器、次に青銅器時代(前700年頃～紀元前後)の無文土器、その内では紅陶と黒陶、その次には鉄器時代(前300年頃から)の縄文壺、などとなり、更には原三国時代(紀元前後～紀元300年頃)や三国時代(300年頃～668年)には高句麗・百濟・新羅・伽耶の各領域でそれぞれ特色ある土器が焼かれ、その後の統一新羅時代(668～918年)には伽耶・百濟・高句麗の文化を十分に吸収した新羅が、仏教文化の興隆によって装飾性豊かな印花文様の作品を完成させています。その遺品は新羅の古都慶州を中心に、いくつかの古墳から大

量に出土しており、死者のための特異な古代美術—古墳美術の一翼を担っています。その有名なものとしては古新羅の、土偶や陰刻文様で飾られた高台付の長頸壺、家・車・舟・騎馬人物・鴨などを巧みに象どった容器、そして統一新羅の印花文の骨壺などがあります。なお、この時代は前期に緑釉陶、中期に三彩陶、いわゆる新羅三彩が現われるなど、朝鮮のやきものが土器から次第に陶磁器へ進展した時代でもありました。

このような朝鮮土器は長い歴史と多様な造形を見せて、愛陶家の興味をそそりますが、一旦鑑賞ということになりますと、仲々簡単にはいきません。それというのも我国で常時それがある点数とまわって陳列されている所は多分東京国立博物館や天理参考館ぐらいなもので、それもそう多い点数ではありません。鉄器を思わす雄勁な趣きの新羅土器、それとは対照的な円さ、柔さで観る者を魅了する肌白き百濟の壺、韓国東南部、洛東江流域に繁栄し、日本の古代文化と最も大きな関わりをもつ伽耶の、金海土器を主とした豊富な遺品群、そして古代の祭祀を想わす謎に包まれた赤い砂金袋—紅陶小壺など、朝鮮土器に尽きることのない魅力を感じている方も大勢いらっしゃることでしょう。

(吉田宏志)

紅陶小壺 先史時代 個人蔵



垂飾碗 古新羅 当館蔵

